

電子辞書に思うこと

20年ほど前に初めて購入した電子辞書は、英和辞書、和英辞書、広辞苑が収録されたタイプだったが、使い勝手がとてもよく大変重宝した。少々値は張ったが、それ以上の価値を感じたものだ。

そしてつい最近、高校生の子供用に最新の電子辞書を購入した。タッチパネル式フルカラー精細液晶が搭載されており、使い勝手は上述の辞書の比ではない。この種の電子機器は日進月歩で進化しているので、驚くにはあたらなかもしれないが、その収録コンテンツの量には少々驚いた。国語系、英語系の辞書がそれぞれ15冊以上収録され、日本史辞典やら化学事典をはじめ〇〇大百科事典まで、図や写真入りで収録されており、まさに知の宝庫である。

ここで貧乏性の癖が出て、もしも紙の冊子版でこれらを購入するとすればいくらだろうかと調べてみた。全部調べる気力はないので国語、英語、事典のいくつかをピックアップして価格を合計してみると、25冊分だけでも電子辞書の購入価格の5倍にもなった。収録されているコンテンツは全部で約150もあるから、その費用対効果はおそらく10倍を優に超えるであろう。さらに、英語の辞書では発音を聞くことができ、動画コンテンツも100種類以上収録されており、冊子版にはない電子辞書ならではの機能がたっぷり付加されている。この買い物はお得感が相当高く、購入者としては大満足である。

費用対効果あるいは投資効果は、民間会社であれば経営上非常に重要な要素だろう。設備投資や技術開発予算に対しての見返りがいくらかを予測し、経営判断をしていく。翻って、我々の仕事のことを考えてみると、基本的に公共事業に関係する研究を行っているためか、研究費の費用対効果がどれくらいかなどという発想はあまりない。研究成果が公共事業などに活用されたとしても、その効果分を数字で算定することは非常に難しいし、そもそも金額では表せない効果もあるだろう。

それでも、研究の費用対効果を高める努力は続ける必要がある。研究費は減少傾向にあるものの一定程度確保されるとすれば、いかにして効果を高めるのか。手っ取り早いのは、研究成果をできるだけ使ってもらうことである。研究成果を論文として発信することに加えて、講演会や展示会、マニュアル類の発行などによって効果の部分が高めるのだ。最近、研究所全体として研究成果の普及に力を入れているのはそのためでもあろう。そして我々は、研究成果の利用者が大満足してくれることを目指して、より質の高い成果を提供していきたい。

(寒冷沿岸域チーム 上席研究員 山本 泰司)

* * * *

表紙左上記号 ISSN 1881-0497の説明

国際的なコード番号である ISSN (International Standard Serial Number : 国際標準逐次刊行物番号)は、ISSN ネットワークが管理する、逐次刊行物を識別するための固有の番号です。この番号は国立国会図書館 ISSN 日本センターから付与されたものです。